2015 年 2 月 15 日

学位申請論文

審査報告書

関西福祉科学大学　大学院

社会福祉学研究科長　殿

学位申請論文審査委員会

主査　　教授　浅野　仁

副査　　教授　津田　耕一

副査　　小笠原祐次

下記の通り、提出された学位申請論文の審査結果を報告いたします。

記

学位申請論文提出者　　壬生　尚美

学位申請論文題目　　『特別養護老人ホームにおける従来型施設とユニット型施設のケアに関する実践課題－施設構造・ケア過程が入居者の生活に及ぼす影響―』

学位申請論文受理年月日　2014年12月20日

Ⅰ　学位申請論文の内容要旨

Ⅱ　学位申請論文審査結果の要旨

Ⅲ　最終試験結果の要旨

Ⅳ　口頭試問の日時

Ⅴ　審査委員会の所見

Ⅰ　学位申請論文の内容要旨

本論文の問題意識は、特別養護老人ホームの「多床室か個室か」の議論のなか、従来型施設とユニット型施設の施設構造の差異による施設ケアの相違がどのようなものとなっているのかにある。従来型施設とユニット型施設のケアを実践する上で介護職員のケア実践の実態について双方の特性を明らかにし、実際にそこで生活している入居者の生活にどのような影響を及ぼすかについて探求している。そして、人生の最期を主体的によりよく生活するためには、従来型施設とユニット型施設のどちらのタイプが望ましいと考えられるか、求められる特別養護老人ホームにおけるケアの実践課題について検討することを目的としている。

本研究では、介護サービスの質的評価の理論的枠組みとして厚生労働省が取り入れたDonabedian(1980)理論、構造(structure)、過程(process)、結果(outcome)を基に、ケアの実践課題を2つの仮説を立て実証的に検証している。研究仮説1:ユニット型施設におけるケア実践構造は、従来型施設より少人数単位のグループケアを提供している。そのため介護職員の仕事への意識・満足感・やりがい感は、従来型施設よりも高い。研究仮説 2:ユニット型施設における入居者の生活構造は、生活環境が整い少人数ケアを基本としている。そのため、従来型施設で生活している入居者よりも、生活満足度や生活の質に関する意識は高い。

本研究の論文構成と内容は、以下のとおりである。

序章　研究背景・目的・枠組み

第Ⅰ章　従来型施設と個室・ユニット施設における実践課題(先行研究)

第Ⅱ章　従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践過程の検証

第Ⅲ章　従来型施設とユニット型施設のケアが入居者の生活に及ぼす影響

第Ⅳ章　従来型施設とユニット型施設におけるケアの両価性の統合

終章　特別養護老人ホームにおける入居者中心の新たなケアの実践に向けて

第Ⅰ章は理論編、第Ⅱ章と第Ⅲ章が調査編、第Ⅳ章が結論となっている。

序章では、特別養護老人ホームが抱えている今日的課題について、本研究を取り巻く状況(背景)、研究目的と仮説、研究枠組みについて記述している。まず、特別養護老人ホームにおいてユニットケアが登場してきた歴史的背景と現在の入居者の生活とケアの現状について整理している。そして、特

別養護老人ホームにおける入居者の生活構造の特徴について述べ、入居者と日常生活に直接かかわる介護職員と多職種連携におけるケアの実践構造や特別養護老人ホームの機能と構造について整理している。さらに、ケアの実践と今後の課題について明らかにするために、介護保険制度下でケアの質的評価の枠組みとして用いられている Donabedian モデル(1980)の 3 つの構成要素から検討することを述べている。

第Ⅰ章では、特別養護老人ホームにおける従来型施設とユニット型施設のケアの実践に関する先行研究を、構造-過程-結果から明らかにしている。従来型施設とユニット型施設の法規定により施設構造の違いを整理し、両施設タイプの有効性について、介護職員と入居者の視点からどのように述べられているか、両施設タイプのメリット・デメリットを概観し、以降の調査研究への橋渡しとなっている。

第Ⅱ章では、従来型施設とユニット型施設の両施設タイプにおけるケアの実践者の視点からタイムスタディ方式で介護職員のケア行動を分析するとともに、介護職員の仕事に対する有能感・満足感・やりがい感について、両施設タイプの施設構造からの影響について分析を行い、研究仮説1を検証している。

第Ⅲ章では、両施設タイプの施設構造とケアの実践過程からの影響を入居者の視点から、入居者の生活行動の特徴をタイムスタディ方式で分析するとともに、入居者の生活意識及び生活満足度に関するインタビュー調査を通して明らかにし、研究仮説 2 の検証を行った。研究仮説 2 は実証できなかったとの結論に至っている。

第Ⅳ章では、以上の研究成果を総括した上で、従来型施設とユニット型施設の両施設タイプの施設構造から生じるケアの実践課題について各々の改善点を述べ、両施設タイプにおけるケアの両価性を統合することの必要性について論じている。従来型は複数の職員が配置されていることから効率性が重視される反面、介護職員の裁量が低く、入居者とのかかわりも希薄であった。ユニット型は介護職員の裁量が高く入居者とのかかわりも濃密であったが、ユニット内で完結してしまっており組織としての統一性に課題が残された。これら、介護職のケアの実態が入居者の生活行動や生活意識に大きく影響を及ぼしていることが見出された。以上の観点から、従来型施設とユニット型施設のケアの両価性を取り入れ、入居者のニーズを踏まえ強み(良さ)を生かしたケアの実践を目指すことが次世代のケアにつながると考える、と指摘している。

終章では、特別養護老人ホームの今後のケアに関して、多職種連携・協働を図るとともにソーシャルワーク的な視点が重要であり、今後のケアの実践課題について示唆するとともに、本研究の意義と課題について述べている。

本論文の主な研究成果を要約すれば、従来型施設とユニット型施設の介護職員、入居者双方の行動や意識を丹念に調査し、その結果、ケアの両価性を取り入れ、入居者のニーズを踏まえ強み（良さ）を生かしたケアの実践を目指すことが次世代のケアにつながるとの結論に至っているところにある。一見当然と思える結論は、わが国が抱える特別養護老人ホームの実態とそこから導き出される課題を浮き彫りにしたものであり、今後の特別養護老人ホームのケア実践の方向性を示唆したものといえよう。

Ⅱ　学位申請論文審査結果の要旨

1. 本研究では、従来型施設とユニット型施設の両施設タイプのケアの特徴をDonabedian（1980）の概念的な理論枠組みをもとに、介護職員と入居者の関係性に着目し意識・行動面の両側面から実証的に明らかにしている。そして、長年にわたる壬生氏の特別養護老人ホームでの調査結果を踏まえ、従来型施設とユニット型施設の入居者のケア実践の課題を整理している。従来型、ユニット型双方の職員のケア行動、意識調査を丹念に行い、分析し、差異を検証し、メリット・デメリットを抽出し、両施設タイプの両価性を提言している。
2. 本研究より、従来型施設に生活する入居者の outcome は、「生活意欲」に関連する活動的側面で有意性が認められ、「日常生活支援」や「生活意欲」が生活満足度や生活の質に及ぼす影響があることを明らかにしている。そこで、多職種連携や地域連携といった施設内ケアにとどまらず、メゾレベルにまでケアの幅を広げ、入居者の生活の質の向上の必要性について言及している。
3. 残された課題として、ソーシャルワークの視点の重要性を述べつつ、その点での論述にやや乏しい感は否めず、ケアワークに主眼が置かれており、今後、この観点からの研究を深化させていく必要があるのではないか。入居者の生活を中心においた観点からの支援の在り方に関する研究を期待したい。

Ⅲ　最終試験結果の要旨

上記の学位申請論文審査結果の通り、審査委員会は全員一致で本学位申請論文を博士（臨床福祉学）の学位を授与するに値すると判定した。

Ⅳ　口頭試問の日時

2015 年 2 月 12 日

Ⅴ　審査委員会の所見

従来型とユニット型特別養護老人ホームにおけるケアの実践の両価性に関する研究は、壬生氏が丹念に調査研究を進め、今後の特別養護老人ホームのケア実践の布石となる研究成果である。その内容は、関西福祉科学大学大学院における臨床福祉学の博士論文として十分な学術的レベルを有し、博士学位に相応しいものと判断した。